

10.健康長寿センターにおける看護学部の活動

1)看護学部の活動方針

健康長寿センターは、高知県立大学の関連学部が連携して、地域の人々の健康長寿の推進および健康長寿社会の構築に貢献する専門職者の知識や技術の向上に努めることを目的として設置されている。看護学部では、運営委員会を中心に健康長寿センターの運営及び活動に参画し、他学部や地域教育研究センターの教員と連携して地域健康啓発研究活動を展開している。また、看護学部教員や領域、学部全体等の単位で健康長寿センター事業を実施することで、高知県内の看護その他保健医療福祉分野に係る人材育成と県民の健康づくりに貢献することを目指している。

センターの活動ポリシーである 5 領域【高知県民の皆様に対し健康長寿を啓発する活動】【高知県民の医療・健康・福祉政策課題を解決する活動】【高知医療センターとの包括的連携を推進する活動】【高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動】【高知県の健康長寿を研究する活動】を中心として、事業を展開してきた。本年度は、これらの事業の中でも「中山間地域等訪問看護師育成講座」、「退院支援体制推進事業」「糖尿病保健指導連携体制構築事業」を看護学部 3 事業として、人員の強化も図り、事業間の連携を取りながら高知県民の医療・健康・福祉政策課題を解決および高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動を強化してきた。

近年特に健康長寿センターとして力を入れてきた取り組みとしては、感染拡大時にも継続的に学びの場を確保することを目的とした YouTube 健康長寿体験型セミナーのコンテンツ作りである。看護学部でも、2~3 回生の学生がサークル活動や地域をフィールドとした実習の場を活かして、魅力ある動画が作成されている。今年度は、「災害が起きたとき～聴覚障がい者への支援～」「脱水症予防」「認知症の人との関わり方」等、テーマにも拡がりみられている。ぜひ、一度視聴して頂きたい。<https://www.youtube.com/@userxf9jd7ip8h>

なお、本報は、健康長寿センターにおける看護学部の主な活動の要約の報告であるため、各活動の詳細な内容は、「令和 4 年度健康長寿センター報告書」をご参照頂きたい。

2)高知県民の皆様に対し健康長寿を啓発する活動

(1)おうちで健康長寿体験型セミナー（小原・坂元）

高知県立大学健康長寿センターでは、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、2020 年から、対面式の健康長寿体験型セミナーに替わり、ユーチューブ配信による健康長寿体験型セミナーを一般市民の方々に提供している。令和 4 年度は、「一緒に災害時に必要な手話を学ぼう」「一年間を通じて脱水予防のポイントを知ろう」「健康づくりのためのフットケア」の 3 つのテーマで教育動画を作成、ユーチューブ配信を行った。

「一緒に災害時に必要な手話を学ぼう」では、社会福祉学部辻講師の監修のもと、高知県立大学手話サークルが中心となり作成した。①解説編②実践編③手話紹介編の 3 つの動画で構成されており、災害時に必要な手話言語や聴覚障害者の方への理解と関わり方について、普段、手話や聴覚障害者の方々に接する機会のないものにとっても、非常にわかりやすく説明している。高知県立大学手話サークルは、看護学部 3 回生が代表者を務めており、看護学部学生も多数、メンバーとして参加している。

「一年間を通じて脱水予防のポイントを知ろう」は、①脱水症について知ろう②脱水症の予防(冬編)～冬も脱水症を予防しよう～③脱水症の予防(夏編)～暑い夏を乗り切るために～の 3 つの動画で構成されている。看護学部小原弘子講師の監修のもと、地域看護フィールドワークの一貫として看護学部 2 回生の学生が参加し、高齢者が脱水になりやすい理由、脱水予防のための生活の工夫について、寸劇や自作の絵を用いてわかりやすく説明をしている。全ての回に、池田光徳健康長寿センター長による「Dr.池田のワンポイントアドバイス」コーナーを設けている。

「健康づくりのためのフットケア - これからも元気で歩く『足』のために -」は看護学部坂元綾助教の監修のもと、地域看護フィールドワークの一貫として看護学部 2 回生の学生 3 名が参加して作成した。動

画は①老化は足から～知識編、②知っておくといいお手入れ編、③簡単にできる足の運動編の3つで構成されている。足の仕組みと働き、高齢者の足の状況、足のお手入れをすることの効果、行ってほしい足の手入れや足の機能を高める運動について寸劇や運動を用いて、高齢者や家族の方にわかりやすく説明している。足の病気に関連する質問に対して、池田光徳健康長寿センター長が回答するコーナーもある。

②とさっ子健診プロジェクト(佐東)

メンバー：佐東美緒、田之頭恵里、徳岡麻由

土佐市では、小中学生に対する健康調査の実施とその後の指導を通して、小中学生とその家族が成長後も健康的な生活を送れるよう、健康の改善を促すことを目的に、平成24年度からとさっ子健診を実施している。本プロジェクトは連携事業の一つとして行われている。

①とさっ子健診

令和4年度の活動として、6月に第1回土佐市連携プロジェクト合同会議が開催された。その中で、令和2年度に開催された健診結果が報告された。また、令和3年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、とさっ子健診は開催されなかったため、令和4年度は、小学5、6年生、中学2、3年生と対象を拡大して開催することが説明された。会議では、健診の円滑な実施方法について土佐市と検討し、受診者の健康観・健康行動に関するアンケート調査については実施することとなった。また、検査項目のeGFRについては、削除することになった。

土佐市保健福祉センターを会場とし、夏、冬2日間ずつ、計230人の受診があった。受付時間を分散したことによって、混雑無く健診は実施された。その他、新型コロナワクチン感染症の拡大防止のため、例年大学の役割として行っているお楽しみコーナーと食事バランスチェックは実施しなかった。

②健康観・健康行動に関するアンケート調査

本年度も、大学の役割である健診当日の健康観・健康行動に関するアンケート調査を行った。

③学部学生の活動参加

- ・看護学部看護研究 小児看護グループ「学童期の子どもの余暇の楽しみ」

看護学部看護学科4回生6名、教員1名が参加。

夏の健診時に、小学5、6年生にインタビューを実施し、看護研究としてその結果をまとめた。結果は、土佐市に報告し、学童期の余暇の楽しみが持つ意味、地域で生活する学童期の子どもの余暇の楽しみが豊かになるための支援について、報告させていただいた。

- ・看護地域フィールドワーク

看護学部看護学科2回生8名、教員1名が参加。

冬の健診2日間に参加し、以下の2つのテーマについて考察した。

①保健師と土佐市の市民との関係性を知る

②とさっ子健診を通して、健康維持・増進のために自分たちにできることを見つける

健診当日に参加し、受付、身体測定、血圧測定、歯科指導に同席し、健診に訪れた子どもやその家族とのやり取り、保健師や歯科衛生士へのインタビューによって、「健康課題を改善するためには子どもの頃から、健康について触れる機会を増やし、健康に対する意識付けをする必要がある。そうすることで、将来の健康につながると考えた。」などの学びがあった。

③地域ケア会議推進プロジェクト(森下安)

本プロジェクトは、高齢者の介護予防を促進するために土佐市が平成25年度後期より行っている「地域ケア会議」の効果的効率的な方法の確立を目的に、会議運営に関する助言、作成した会議に使用するアセスメント様式をもとに会議内容の課題分析の支援を行うものである。今年度も引き続き、看護学部教員が看護師アドバイザーとして地域ケア会議に参加した。小原と中井が7回地域ケア会議に参加した。昨年度までは、週に1回実施されていたが、本年度からはモニタリングの充実を目的に2回/月の開催に変更となった(第1週に新規事例、第3週にモニタリング会議)。新規事例の開催から3か月後に同じアドバイザーが参加し、ケアマネジャーや事業所がアドバイザーにどのように取り組み、どのような変化がみられ始めているのかを確認する方式に変更になっている。

また今年度より、薬剤師と看護師が同席し地域ケア会議が開催されている。提示されている事例は例年と変わらず循環器疾患や脳血管疾患を既往に持つ高齢者や認知症高齢者の事例が多い。地域で生活していく上で、身体と生活の視点で統合したアセスメントに基づくアドバイスが必須であるため、次年度も継続して参加する予定である。

3)高知県の医療・健康・福祉政策課題を解決する活動

(1) 中山間地域等訪問看護師育成講座(森下^{*)})

①事業概要

本講座は、平成27年度から高知県中山間地域等の訪問看護師の確保・育成・定着及び小規模訪問看護ステーションの機能強化を目的に、大学の教育力・学習環境を活かした「中山間地域等における新任・新卒訪問看護師育成プログラム」を開発し運用している。中山間地域等の訪問看護ステーション(以下訪問看護ST)と協働し、高知県、高知県看護協会、高知県訪問看護連絡協議会、高知県医師会、高知県社会福祉協議会、高知医療センターと共に新任・新卒訪問看護師育成に取り組み、新卒者15名を含む合計157名が修了し、在宅や医療機関等で活躍をしている。

②事業成果

i. 訪問看護スタートアップ研修(35科目 138時間・特別講義2科目)

【開催日時】前期：令和4年5月11日(水)～令和4年7月27日(水)

後期：令和4年10月5日(水)～令和4年12月22日(木)

【受講者】21名：新卒卒2名、中山間卒4名(スタンダード卒2名、サード卒2名)

全域卒15名(うち通年1名)

ii. 学習支援者研修会・検討会

新卒・新任者が所属する訪問看護STの学習支援者となる管理者等を対象に、学習支援に関する研修会・検討会を6回開催し、学習支援に必要な研修と課題や対処を検討した。

iii. 新卒および修了者フォローアップ研修

新卒者を対象に、フィジカルアセスメントフォローアップ研修を4回開催した。また、修了者対象には2ヶ月に1回、訪問看護の24時間体制と緊急時訪問、訪問看護に活かすPOCU、がん疼痛管理、ACPと看取り・エンゼルケア、入退院支援などをテーマにフォローアップ研修を開催した。ケースプレゼンテーションは7回実施し、コンサルテーションは事例やキャリアに関する7件の相談があった。また、公式ラインの運用を開始し修了者への案内を行った。

iv. 保健所地域別の訪問看護推進ブロック会議

須崎、中央西福祉保健所管内の2ヶ所で開催し、各保健所管内の在宅医療・訪問看護の現状と課題を共有し、訪問看護師育成に関する課題や期待について意見交換を行った。

v. 参画団体による企画会議

関係協力団体による企画会議を2回開催し、新卒・新任訪問看護師育成の課題や対策、新卒や修了者のフォローアップ研修、事業計画について協議し、高知県の訪問看護推進や人材育成における関係機関の役割について検討した。

③活動評価

今年度は、令和3年度と同様に対面とオンラインとオンデマンドを受講者が柔軟に選択できるハイフレックス型研修を取り入れ、Webを利用した記録物の提出などICTを活用した学習支援を行った。令和4年度の本研修(35科目 157項目)の学習目標の到達度を「とても思う」から「まったく思わない」までの5段階で評価した自己評価点の平均は 3.83 ± 0.74 (標準偏差)であった。また、新卒卒・中山間卒スタンダードコース3名の修了時の目指す姿および学習課題の自己評価は、ほぼ全員が「できた・まあまあできた」と捉えており、プログラムを活用して自信をもった単独訪問も可能となり、訪問看護STの一員としての役割を担い訪問看護に携わることができていた。なお、本講座の事業内容、実施体制、プログラムの詳細、事業評価については、本学健康長寿センター報告書に掲載している。

(2) 高知県介護職員喀痰吸引等研修(川上・竹中)

①活動の概要

本事業は、平成24年4月1日から施行された介護職員等によるたんの吸引又は経管栄養(以下「たんの吸引等」という)の実施のための研修の制度化を受けて、居宅及び障害者支援施設等において必要なケアをより安全に提供するため、特定の者に対して適切にたんの吸引等を行うことができる介護職員等を養成することを目的としている。基本研修と現地で実際のたんの吸引等を指導する実地研修から構成される。

地域完結型医療の推進に加え、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、入院・入所中の面会が制限されるため、医療処置や介護が必要なながらも在宅療養を選択する方が増え、居宅や施設でたんの吸引等を実施できる介護職員等の養成の必要性は高まっている。本学では感染予防対策を十分行った上で基本研修を全4回開催した。具体的には、体調管理や換気を徹底し、実技研修では手袋だけでなく、ガウンやフェイスシールドの使用方法も盛り込み、感染予防策が実践できるように工夫した。

②活動成果および評価

<活動成果>

基本研修は、講義研修(8時間)と実技研修(2時間)で構成されている。講義終了後に筆記試験を行い、90点以上(100点満点)の合格者に実技研修を行った。

結果、受講者13名中11名が筆記試験に合格し(合格率84.6%)、シミュレーターを用いて喀痰吸引(鼻・口・気管切開部)と胃ろうからの栄養注入(液体栄養・半固形栄養)を実施、基本研修を修了できた。

<評価>

次年度から初めて喀痰吸引や胃ろう注入の必要な方を受け入れる予定の施設からの受講や、職員が交代で受講し、全員がケアできることを目指している施設もあった。受講者は少ない(令和2年度19名、令和3年度13名)が、研修継続のニーズはあると考えられる。受講者の所属施設も、訪問介護ステーション、共同作業所や放課後等児童デイサービスなど様々であり、幅広い年代の医療的ケアが必要な人々の支援につながっている。

(3) 退院支援体制推進事業

①活動の概要

入退院支援事業は、中央西福祉保健所の依頼を受け平成22年度から地域病院協働型入退院システム構築に取り組んだ実績から発展し、平成28年度からは高知県の基金事業として位置づけられている事業である。

本事業は平成28年度に本学が策定した「地域・病院・多職種協働型の退院支援の仕組み作りガイドライン(以下、ガイドライン)」(ガイドラインは改定、洗練化を行っており、現在はVer.3である)の普及・啓発を推進するとともに、ガイドラインを活用して病院の入退院支援体制の構築及び、入退院支援・退院調整における院内の横断的な調整役を担う「相談支援事業」や地域のコーディネーターとなる人材育成や病院内外が協働する入退院支援を推進する管理者、看護管理者育成などの「研修事業」、および自施設で入退院支援体制の改善に取り組むことを目指す「モニタリング事業」の3事業を展開している。

②活動成果及び評価

i. 高度急性期病院からの入退院支援システム構築

今年度は、新たなモデル基幹病院である高度急性期の高知医療センターにおいて、ガイドラインに沿って、基盤整備、運営メンバーを選定し、運営メンバー会議で「優先課題」「目指す姿」を検討し、「入退院支援可視化シート」を作成した。運営メンバー会議が感染予防に十分配慮し、全て対面で実施することができ、高知医療センターにおいては、運営メンバー会議を通して、基幹型地域包括支援センターとの連携を強化する取り組みの検討がスタートした。事例展開については、事業開始が遅れたこと、さらに第8波の感染拡大の影響を受け、次年度となった。

あき総合病院では、コロナ感染拡大の影響により、事業開始や展開が大幅に遅れ事業に参加して3年が経過したが、今年度は、事例展開と振り返り会、モニタリング運営会議を開催し、可視化シートの洗練化に取り組んだ。

ii. 回復期病棟からの入退院支援システム構築とモニタリングシートの洗練化

昨年度開始したいずみの病院における仕組みづくりはコロナ禍において年度内での事例展開が十分展開できなかったため、継続してシステム構築を支援した。新たなモデル基幹病院である細木病院では、ガイドラインに沿って、基盤整備、運営メンバーを選定し、運営メンバー会議で「優先課題」「目指す姿」を検討し、「入退院支援可視化シート」を作成したが、第8波の影響を受け、事例展開には至らなかった。

地域病院多職種協働型入退院システムモニタリングシート(以下、モニタリングシート)の活用の現状の把握と活用支援状況について情報収集を行った。また、モニタリング運営会議を6病院で実施し、入退院支援システムの発展拡充に向け、課題を明確にし、課題解決に向けた相談支援を実施した。以上の活動より、効果的な活用方法について紹介するモニタリングシート活用マニュアルを作成し、webサイトに掲載した。

iii. 研修事業、報告会

研修会は研修目的に応じハイフレックス型と対面型とし、感染予防対策を徹底し研修日を変更しながらもすべて開催することができ、県内66施設、延べ571人の参加があった。報告会は、オンデマンドにて開催し、事業報告会は高知のみならず全国から視聴希望があり、3月21日～31日の視聴期間における総再生回数は186回であった。

IV. 総合評価

相談支援事業、及び研修事業、モニタリング事業において、75施設、延べ896人の参加があった。また、報告会の総再生回数は186回であった。今年度も新型コロナウイルス感染状況を鑑み、臨機応変な対応を余儀なくされたが、委託元の高知県と協議し、当初の委託内容を一部変更しながらも事業展開を行うことができた。相談支援事業・研修事業を展開することにより入院時から、地域・病院・多職種で切れ目のない円滑な移行を目指した「地域・病院・多職種協働」による入退院支援の体制づくりの必要性について県全体への周知に繋がっていると言える。また、モデル基幹病院でのモニタリング運営会議、および大交流会の報告を通して、各医療機関等が様々な工夫に取り組み入退院支援システム改善を行うなど、入退院支援推進を病院主体で取り組む事例も多くなっていることから、高知県の地域包括ケアシステムの重要な構成要素である「在宅医療」・「介護連携」にも、寄与できたと考える。

(4)糖尿病保健指導連携体制構築事業(内田・益)

令和元年度より高知県から委託を受け、「糖尿病保健指導連携体制構築事業」を開始した。本事業は、地域の特定健診ハイリスク者、糖尿病重症化ハイリスク者及び治療中断者に対して、多職種との連携・協働体制のもと継続的かつ効果的な保健指導と生活支援を行う「血管病調整看護師」を育成し、その活動を支援するものである。

今年度は、第1期～第3期のモデル基幹病院の糖尿病療養支援体制の強化として、スキルアップ研修会を3回開催した。さらなる活動支援として血管病調整看護師の介入事例及び血管病調整ケア活動における課題の検討を目的に、施設ごとにコンサルテーションや事例検討会を実施した。報告会ではモデル基幹病院の代表2施設が活動報告を行う予定である。(表1参照)

活動評価としては、コロナ感染拡大後、レベルIで実施する糖尿病教室や教育入院を休止している施設が多く、レベルII～IIIで必須となる院内多職種との協働やカンファレンスが激減しており、院内連携体制の構築が遅れている施設が多く見受けられた。また、今年度は糖尿病重症化予防や血管病調整看護師の周知を目的に2回の公開講座を実施し、医療保健福祉従事者からは高い評価が寄せられていたものの、県民へのより一層の周知が課題である。(詳細は健康長寿センター報告書参照)

表1. 令和4年度糖尿病連携体制構築事業 血管病調整看護師研修会

第1回血管病調整看護師 スキルアップ研修会「レベルI」	参加者26名 スタッフ7名	Web開催/ 高知県立大学池 キャンパス	令和4年8月1日 13:00～17:00
第2回血管病調整看護師 スキルアップ研修会「レベルII」	参加者31名 スタッフ6名	Web開催/ 高知県立大学池 キャンパス	令和4年9月28日 13:00～17:00

第3回血管病調整看護師 スキルアップ研修会「レベルⅢ」	参加者 27名 スタッフ 5名	Web開催/ 高知県立大学池 キャンパス	令和5年2月7日 13:00～17:00
合同事例検討会	参加者 25名 スタッフ 6名	Web開催/ 高知県立大学池 キャンパス	令和5年2月14日 13:00～17:00
「血管病調整看護師」 院内検討会・コンサルテーション	①参加者4名 スタッフ4名 ②参加者5名 スタッフ4名 ③参加者3名 スタッフ4名 ④参加者3名 スタッフ3名 ⑤参加者3名 スタッフ4名 ⑥参加者16名 スタッフ4名 ⑦参加者3名 スタッフ4名 ⑧参加者2名 スタッフ3名 ⑨参加者2名 スタッフ3名 ⑩参加者4名 スタッフ4名 ⑪参加者10名 スタッフ3名	①②③⑤⑦⑨⑪ Web開催/ 高知県立大学池 キャンパス ④⑥ 対面・WEBの ハイブリッド開 催 ④⑦⑩ 対面	①三愛病院 令和4年7月27日 ②佐川町立高北国民健康保険病院 令和4年8月22日 ③高知県立あき総合病院 令和4年8月25日 ④近森病院 令和4年9月9日 ⑤高知記念病院 令和4年11月7日 ⑥高知医療センター 令和4年12月16日 ⑦くぼかわ病院 令和5年2月1日 ⑧高知大学医学部附属病院 令和5年2月15日 ⑨高知高須病院 令和5年2月17日 ⑩高知赤十字病院 令和5年2月28日 ⑪高知県立幡多けんみん病院 令和5年3月14日
令和4年度高知県糖尿病保健指導連 携体制構築事業報告会	未定	期間限定オンデ マンド配信	令和5年 3月24日

4)高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動

(1) 高知県新任保健師研修会(小澤)

高知県新任保健師支援プログラムの一環として、新任保健師に対する研修会(リカレント教育・ケア検討会)を、高知県健康政策部保健政策課と協働で、企画し、実施した。

高知県内保健師1年目から4年目までを対象として「個別対応から地域の課題を捉える、個別支援に終わらず、この問題を集団・地域の課題へと発展させる」ことを目的に、保健師として必要な能力を段階的に獲得することができるよう、OJTとOff-JTを組み合わせたプログラムとして企画・実施した。

COVID-19の影響で、3年目研修会は1回目が中止になった。そのため、例年2回で構成している研修内容を、1回でも保健師としての能力を獲得できる機会になるように高知県の担当者と相談しながら実施した。具体的には、事前課題に取り組んだ内容について書面にて助言をおこなった。福祉保健所とも連携をとりながら、必要に応じオンラインでディスカッションをする場も設定した。そして、集合研修の際に、1回目で行う予定であった講義を行い、さらに書面指導によって改善した事前課題を持ち寄り、グループワークを実施した。また、1年目研修では、受講者が入職時からCOVID-19流行下での保健師活動を経験していることを踏まえ講義内容を工夫した。

個別対応で具体的な指導を書面にて行うことで、参加者の成果物に対する改善策がより明確に示されており、一定の研修効果を維持できたと考える。また、圏域によっては、フォローアップ研修のプログラムにて、グループワークによる対面での支援も行うことができた。

感染予防対策を行いながら対面でのグループワークを実施することで、受講者は、保健師同士の情報共有やつながりができ、学び・住民の健康を守る仲間としての場を持つことができた。このように、本研修を高知県内の行政機関に所属する保健師同士の横のつながりを強化する機会とすることができたと考える。

本研修のグループワークや個人面談、講義を通して、個別支援の展開、自己の振り返り、個から地域へ展開する地域看護の視点、PDCA サイクルに基づく事業展開方法等について学ぶ機会を提供した。また、研修に参加できなかった受講者に対しては事前課題に対し書面にてコメントを返すことで、受講生の日々の取り組みの継続・発展に寄与できるように取り組んだ。新任期保健師の育成に貢献するとともに、次年度の保健活動につなげることができたと考える。

(2) 公開講座：「フィジカルアセスメント研修」(高橋)

今回の公開講座では、県内の卒後3年目まであるいはフィジカルアセスメントに自信がない看護師を対象に、基本的な知識の確認の講義とシナリオ シミュレーションを組み合わせた研修を開催した。

研修内容は、フィジカルアセスメントの基礎知識の確認と今回の症例(シナリオ)の理解に必要な循環器に関する知識を中心に行われた。受講生の背景(所属病棟の特徴や経験年数)を確認しながら、バイタルサインをみる意義や目的、問診・視診・触診・打診・聴診を実施する際に注意するポイントについて、基本に戻って学びなおすことであった。また、報告ツール：I-SBAR-Cのポイントについて説明し、効果的な報告について確認した。

後半のシナリオ シミュレーションでは、前半の講義で確認した循環器のフィジカルアセスメントに必要な手技を用いて、模擬患者へのアセスメントを行った。

実際の演習後のデブリーフィングの場面においても、フィジカルアセスメントに集中するあまり、目の前の模擬患者さんを置き去りにしてしまっている自分に気づくことができ、臨床現場ですぐに使えるスキルの獲得に繋がる機会になったという声が聴かれた。

感染拡大の影響で何度も公開講座の日程を変更したことも影響しているが、受講生数については、課題が残っている。次年度以降は、開催方法や広報活動等さらなる工夫を重ね、引き続き「高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動」を展開していきたい。

(3) 地域ケア会議 コンサルテーション事業 (森下)

※今年度実施無し

5) 高知県の健康長寿を研究する活動

(1) 研究から得られた知見を高知県内に発信する (小原)

我々は、高知県内の褥瘡を保有する在宅療養者(以下在宅褥瘡患者)の実態調査を2016年(小原他、2017)および2019年(小原他、2022)に実施した。前回の調査から3年を経た令和4年に、我々は、3回目となる高知県における在宅褥瘡患者の実態を調査し、その結果が、令和5年3月に、四国公衆衛生学会雑誌第68巻論文集に掲載された。本調査は、在宅療養にかかわる専門職にとって貴重な知見である。このことから、本調査結果を高知県内の医療・介護にかかわる機関や施設と共有することを目的に、発信活動を行った。

発信活動として、調査に協力いただいた、高知県内の訪問看護ステーション81施設、および、医療機関の訪問看護部門15施設の合計96施設に論文別刷りを配布予定である。高知県立大学健康長寿センター活動報告書とともに、高知県関係課、市町村、福祉保健所、地域包括支援センターなどに配布予定である。また、高知県内の医療機関にも配布予定である。